かぐらおか

（題字は前学長　山田守英氏）

第 33 号
昭和57年 9 月 1 日

編集　旭 川 医 科 大 学
　　厚 生 補 導 委 員 会
発行　旭川医科大学教務部学生課

（写真撮影　施設課　大西功容）

旭 川 空 港（表紙写真募集中!!）

内　　容

北方脅威論について……丸子　基夫… 2
夢 ―患者も医者も―……高杉　佑一… 3
卒業生の動向…… 4
第 8 回医大祭…… 5
第29回北海道地区大学体育大会…… 6
第25回東日本医科学生総合体育大会…… 6
研究室紹介……川堀　眞一… 7
武道場新設決定！…… 8
学内での盗難防止について…… 8
窓　外……宮岸　　勉… 8

北方脅威論について

丸　子　基　夫

昨年の夏ごろ、日本が固有の領土として一貫して返還を要求している北方四島にソビエトが突如として軍備を倍増して国会でもジャーナリズムでも問題になった。我国の強い抗議に対しソ連は「日ソ間に領土問題は全く存在しない」との従来の主張を繰返したうえ「われわれは社会主義の獲得したものを決して放棄しない。南クリル諸島は今や重要な漁業基地であり、好適な町もできている。この価値ある領土を、今や可能性をましてきた米日軍の侵攻から守るために守備軍を少し増強したにすぎない。」と言明したようである。

ここ数年来、ミグ25の函館亡命だの、ベトナムでの基地設営だの、故障した原潜の領海通過などで騒がしくなっていた対ソ警戒論が、ここで一きょに北方脅威論となって噴出したのも当然である。北海道侵攻の予想図がマスコミをにぎわし「道防衛には最低いまの倍の8個師団がいる」とか「ソ連のまづ狙うのは宗谷・津軽両海峡の確保だ」などの興味ぶかい戦略論がとび交った。実際アメリカはソ連のアフガン侵入をむざむざ放置しているし、米国防省筋も、アメリカは欧州と中東ペルシャ湾を守るのが精一杯だから、日本は西太平洋の防衛に相当の義務をもつことを覚悟すべきだと明言している。勿論この対日要求には次の論理が根にある。「軽軍備のおかげで大工業国となった日本がテレビ・自動車などでアメリカ経済に大損害を与えているんだから、牛肉やオレンジを自由化するのは当然だし、スパイ活動でＩＢＭの秘密を盗む奴は断乎罰してやる。ソ連の武力がアメリカを上廻ってきて、とみにagressiveになった現在でも防衛費がＧＮＰの１％でいいなどと逃げている国民には、それ相応の恐怖感と現実認識をもたせてアメリカの兵器を大いに買ってもらおう」。かくて昨年春の日米首脳会談においてはアメリカの警告と脅しが効を奏し、我国の本年度の緊縮予算の中で防衛費だけが 7.5%増と突出し、自民党の多数派と防衛産業を小躍りさせたのである。

ソ連の突然の重武装の真意はどこにあるのか？クレムリンのみぞ知るではあるが、たしかにクナシリとエトロフは海軍と漁業のほかに保養・観光の良地として人口もぐつとふえたというし、何よりも太平洋に直接のぞむ暖い良港ができているのだから、ソ連としては絶体に確保したい戦略要地のひとつだ。(原潜基地といわれるペトロパブロフスクよりも、将来的には日本全体に睨みを利かす意味でもっと重要になるだろう。)そのせいであろうか、昨年本州にでかけて「北海道から来た」と言うとタクシー運転手や商店主らから「旭川ってソ連に近いんでしょ、大丈夫なんですか。ソ連艦隊は凍らない津軽海峡がぜひ欲しいんでしょう」などと聞かれたのは私だけではないようだ。続けさまに西側陣営をゆさぶったアフガン侵攻、ポーランド介入の危機、ソ連軍備優位説が、南千島軍備強化によって濃厚な北海道危機感をかもし出したことは理解できる。本道は三方向でソ連に面しているのに海と空の自衛隊は手薄で、頼みの米軍基地は全くない。

あきらかに通常兵器で劣るアメリカが、しかも最近とみに自己本位の言動をするようになったアメリカが、北海道を守るために第7艦隊や沖縄の海兵隊を投入するだろうか。ましてや本道のために核兵器を使う大冒険をやるだろうか。人口も少く大工業に乏しい北海道を失っても日本にとってはさしたる痛手ではないと自民党政府は考えているのではないか。本州の人たちはおよそこんな感じでもって北方脅威論を受けとめたと思われる。つまり自衛隊が死力をつくして闘うとしても、万一の場合は、北海道に住んだのが不運なのだから諦めるか、又はあの帯広の宗教団体のように早く本州へ移って来たら、と心配してくれるのだ。心の底には「本州はアメリカが核でもって守ってくれる筈」という奇妙な優越感があることは疑いない。

私としては、憲法9条にもかかわらず常識からして、日本は自衛のための交戦権をもつべきだし、また米国には20年前の強さがもうないのだから資源の大半を海外に頼っている工業国の防衛費がＧＮＰの１％を少しこえてもよいと考える。また日米安保があり、新憲法の世代と断乎反戦の女性の合計数がずっと多いのだから、日本が徴兵制をしいたり軍国主義になるなどの恐れは皆無とも思う。そして世界のあちこちで忙しくて疲れているソ連が全面戦争の危険をおかして本道を攻撃する確率は甚だ少ない。万が一に侵略された時は、私は腰抜けの非愛国者だと宣言して抵抗などせず、猜疑の目で外国兵を見ながら「戦争と平和」でも再読し、1945年沖縄戦で住民多数が陥ったあの惨劇を回避することに努力し、人々が再び過疎地に入るよう説得するつもりである。

（ドイツ語　教授）

夢 ―患者も医者も―

高　杉　佑　一

踊る阿呆に、見る阿呆、どうせ阿呆なら踊らにゃソンソン。実際には見たことのないのに、阿波踊りのはやし文句を聞くと祭りの高まりを身近かに感ずる。立場で変る心理の表現も巧みだ。

医者になって何年かたち糖尿病学会に初めて出席した時、特別講演の会場にお年寄や目の不自由な人達がぞくぞくと入場してくるのを奇妙に思った。日本糖尿病協会（糖尿病患者の全国組織）の人達であった。特別講演を患者と医者が一緒にきく慣わしのあることをはじめて知った。脂質代謝に関心を持ち、老年医学や糖尿病とのつながりが深まりはじめた頃だった。学会会場ですぐ隣りに患者がいるという実感の重みは忘れがたい。

何の説明もなく「三度の食事のあとに服用しなさい。」と薬を渡されたら、朝食抜きで昼食と夕食しかとらない習慣の患者はまずとまどうだろう。そしてその後は……きめ細かな治療には患者の生活像を知ることも欠せない。旭川医大附属病院の入院患者用診療記録には、患者の生活像について記入する用紙が必ず含まれている。この生活像を見ていて、運動不足の人が多いことに驚く。しかしこれは病人に限ったことではない。

仕事が忙しくて疲れるからと、終ったあとは酒を飲んだりテレビを見たりという生活をくり返していた高校時代の友人は、一寸したきっかけから早朝テニスをするようになった。その結果却って仕事の疲れが少なくなったのに気付いた。運動不足で体力が低下し、体力にゆとりのないためにすぐ疲れるという悪循環が多くなっている。食糧不足の時代から物の豊富な時代となり、食べすぎの害が叫ばれているが、現状では消費したエネルギーに応じて食べるやり方では不充分になった。体力の維持・養成に必要なだけの運動を日常生活のなかにとり入れることが第一で、それに応じた食事を考えることが大切になってきた。

昨年7月西ドイツのハンブルグで第12回国際老年学会議があり、6日間滞在した。学会4日目の午後は見学の時間とされ、最新の老人病院や由緒ある老人ホームなど17コースが用意されていた。ハンブルグ市内や近郊に老人関連施設の多いことに驚きながら、私はHamburger Turner schaft von 1816の見学を選択した。ここは世界で最も古いスポーツクラグで、現在約5,000名の会員がいる。このうち約400名は老年者スポーツグループに所属し、90分間の体操やダンスやゲームを毎週2回楽しんでいる。この日体育館に集った約100名は20歳代とみられる一人の男性指導者のかけ声で位置についた。ゆっくりした音楽とともに柔軟体操、ついでダンスが始った。小学生の団体ゲームの雰囲気だ。女性が圧倒的に多い。白シャツ、黒ズボンのなかに、赤シャツやホットパンツも目につく。テンポの速い音楽に変ると動きが揃わなくなる。各自が自分のペースに合せた動きをしている。どの顔からも汗が流れおち出した。すぐ目の前に展開するダイナミックな動きに、小学生とか老人という感じは消え、ただ圧倒された。踊り終ったあとの晴れやかな表情が良かった。いつまでもハアハア呼吸している人は見かけなかった。このスポーツクラブでは心筋梗塞をおこした人達のリハビリテーションコースを10年程前に始め、その経験も生かして1977年に一般の老年者コースをスタートさせた。ダイナミックな動きの迫力のかげに、よく準備された運動プログラムと個人差を計算に入れたこまかな配慮がうかがわれた。ハンブルグでこのスポーツクラブのジャズ体操コースを見学した佐藤彰・正子夫妻は、「これこそ誰でもが楽しめる体操なのだという認識をあらたにした」、「あらゆる年齢層への指導の可能性を感じた」とその著書「ジャギー入門」に書いていた。

冬の寒さきびしい旭川では冬期間運動不足になる人が特に多いようだ。スキーやスケートの楽しさは格別だし、ジョギングやランニングも良い。しかし冬でも気軽に汗を流せる屋内運動も一層盛んになって欲しいものだ。そのような場所がふえ、指導者や仲間が沢山でき、運動不足のまま家や職場にいる人達、糖尿病や肥満症の人達、そしてお年寄、すべての人達が各自に適した運動を仲間とともに楽しめるようになればすばらしいのだが。

とはいえ運動は元来からだに対するストレスであり、健康のためにと思っても無理しすぎては逆効果になる。まして病人やお年寄りやふだんほとんど運動していない半病人ともいえる人達では、運動の影響に個人差が大きい。適切な運動についての指導が大切になる。病人に対する薬の処方だけでなく、最近は食事の処方も普及し効果をあげている。今後いろいろな分野で運動処方の研究が更に進み、これらを含めた健康の回復・維持・増進のための生活処方が容易になり、またそれを実現できる指導者、施設などの環境条件のととのう日が待遠しい。

（第3内科　助教授）

卒業生の動向

第４回卒業生98名は、第73回医師国家試験で、85名が合格、（昭和57年５月15日付け厚生省の発表）合格率86・７％で全国国公私立大学では18位の成績であった。

卒業生の動向は次のとおり。

※　勤務先病院名、大学名のないものは本学である。
住所は帰省先である。

第8回　医大祭

新たな一歩
自分の殻を打ち破れ！

第8回医大祭は、プレ企画の「学生講演会」、「ダンスパーティー」、「クラス対抗スポーツ大会」等多彩な催しを経て6月17日(木)前夜祭で幕が開いた。

一般公開日の初日、19日(土)には学園祭の女王と呼ばれている『山下久美子コンサート』が本学の体育館で行われ初日を飾った。20日(日)も天候に恵まれ、医学展、模擬店等賑わいを見せ、5,000名を越える市民の観覧を得ることができ、好評のうちに幕を閉じました。

（学生課）

向　山　　新

「新たな一歩、自分の殻を打ち破れ」をテーマに掲げた第8回医大祭は、無事4日間の日程を終えることができました。今回は、初めての試みも多かっただけに、まさに「無事」終わったという感じでした。

4月、「クラスの活動を中心に……」という方針が決まり、5月になってテーマが決定しました。医大祭パンフレットには『医大祭の「新たな一歩」は私達の一歩です。伝統に支えられた一歩ではありますが、過去にとらわれた一歩ではありません。未来へ向けての一歩です。かって、人類が初めて月に立ったとき、その一歩は、人類にとって大きな一歩でした。今年の医大祭の「新たな一歩」は旭川医大にとって大きな一歩になるでしょう。』と書きました。そして今、その医大祭を終えてふり返ってみると、どの程度大きな一歩であったかはともかくとして、確実に一歩踏み出すことができたと思います。具体的に、どんな点が評価できるかということになると難かしいですが、何点か触れてみたいと思います。

まず、「クラスの活動を中心に、ひとりでも多くの人が参加し……」という方針についてです。今までも、ひとりでも多くの人に参加してもらえるような努力、工夫はいろいろなされてきましたが、今年は「クラスの活動」を中心において考えました。今後、医大祭が学生の間に根をはった、充実したものとなるためには、ひとりひとりの学生の考え方、要求が反映されなければなりません。大学でひとりひとりの要求を拾い、まとめてゆく上で一番重要なのはクラスの活動といえましょう。したがって学祭の今後の発展のためには、学祭を通じてクラスの活動を活性化する必要があると考えたのです。その具体的なあらわれが、今回のクラス対抗スポーツ大会でした。スポーツ大会自体は、ひとりひとりの要求をひろう場と

はならないでしょうが、これが今後のクラスの活動をまとめるきっかけとなればと思います。そして、こういった機会を提供した大学祭という場に、自分達の活動を発表してもらいたいと思います。もうひとつの新しい試みとして、コンサートの開催があります。医大祭の中で、何か大きなイベントをもうけることで、今までは参加しなかった人達がひとりでも医大祭に触れて何かを感じてもらうことが、今後の学祭の発展の上で大きな役割りを果たすのではないかという期待を込めての企画でした。実現までには予想以上の苦労がありましたが、一つの実験としての意義は大きかったものと確信しています。

これらの「ひとりでも多くの人の参加」をめざした企画に力が入れられた一方、今年の医大祭では医学展等も活発に取り組まれました。まだまだ、医学展のための医学展という感はありましたが、2年生、3年生の精力的な取り組みに今後も期待したいと思います。医大祭にはお祭の面とこれらの、いわば学問的側面とがあるわけでこの2つの側面の兼ね合いは今後も問題となることでしょう。その点では、今年の医大祭もほんの小さな一歩を踏み出したに過ぎないと言えます。今後もいろいろな人の意見を交えて試行錯誤しながらでも、方向性を探っていってもらいたいと思います。

今まで触れたように、今年は過去7回の蓄積の上に立ち、新しい実験をしたつもりです。新しい道への一歩を踏み出したつもりです。今後さらに歩みを進めて新しい医大祭を、旭川医大全体の力で創っていってもらいたいと思います。

（第8回医大祭実行委員会委員長）

第29回
北海道地区大学体育大会

第29回北海道地区大学体育大会は本学が当番校となり開催された。7月16日㈮の開会式には、本学体育館において、選手約200名が参列し選手を代表して4年の山本長史君が選手宣誓を行った。

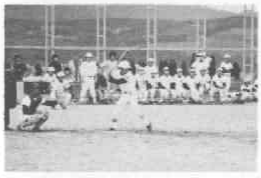
7月17日㈯より、43単位大学から4,000余名の選手を迎えて、旭川医大を主会場に、22の会場で男子13種目、女子8種目にわたり、熱戦がくり広げられたが、大会2日目雨のため、屋外競技の一部が順延され、大会予定3日間が4日間になりましたが、選手・体育系クラブ学生及び大会役員の協力もあって全種目無事終了することができた。

今大会は、準硬式野球、準優勝、陸上競技(男子1,500m山本長史1位、男子110m H小黒恵司3位、女子100m岡本範子3位）で男子8位、女子7位、バスケットボール男女共ベスト8まで進出、卓球男子決勝トーナメント進出、その他全種目、善戦健闘した結果、総合成績は男女共に12位であった。

（学生課）

第29回北海道地区大学体育大会成績一覧

種目＼順位		優勝	準優勝	3位	旭医大
陸上競技	男	函教大	北学園	道工大	8位
	女	道女短	旭教大	北大	7位
硬式野球		道都大	旭教大	旭川大 北学園	
準硬式野球		釧教大	**旭医大**	函教大 札医大	準優勝
軟式庭球	男	北学園	旭川大	旭教大 帯畜大	1回戦敗退
	女	道女短	旭教大	岩教大 帯畜大	
バスケットボール	男	道都大	北学園	岩教大 釧教大	3回戦敗退
	女	道女短	札教大	藤女大 文女短	2回戦敗退
バレーボール	男	旭教大	帯畜大	専修短 道都大	予選リーグ敗退
	女	道女短	北星大	帯畜大 岩教大	
サッカー		札商大	旭教大	北星大 岩教大	1回戦敗退
卓球	男	旭川大	岩教大	北学園 旭教大	決勝トーナメント 1回戦敗退
	女	静修短	藤女大	天女短 栄養短	予選リーグ敗退
バドミントン	男	札商大	北学園	札教大	2回戦敗退
	女	道女短	札教大	帯畜大	1回戦敗退
柔道		道都大	道都短	北学園 旭川大	予選リーグ敗退
剣道	男	樽商大	北東海	道工大 札商大	予選リーグ敗退
	女	道女短	苫駒短	帯畜大 旭教大	1回戦敗退
弓道 (女子はオープン)	男	北大	樽商大	北学園	8位
	女	北星大	北大	帯畜大	7位
ハンドボール		室工大	北学園	北星大	予選リーグ敗退
総合	男	北学園	道都大	旭教大	12位
	女	道女短	旭教大	札教大	12位



第25回 東日本医科学生総合体育大会

第25回東日本医科学生総合体育大会（夏季大会）は、東北大学医学部が主管校となり7月20日～8月6日までの18日間にわたって行われた。

本学からは18種目に310名が参加、準硬式野球、準優

勝、バスケットボール女子が二度目の出場で3位、陸上競技3位（4年山本が1500m、5000m 3000mSCに大会新記録で優勝、5年岡本が女子100mに大会新記録で優勝5年小黒が三段跳に優勝）と各種目に善戦健闘、総合成績は35大学中13位であった。

（学生課）

種目＼順位		優勝	準優勝	3位	旭医大
陸上競技		慶応	新潟	**旭川**	3位
準硬式野球		群馬	**旭川**	東北	準優勝
硬式庭球	男	自治	千葉	秋田大	2回戦敗退
	女	女子医	群馬	日大 福島	〃
軟式庭球		東北	群馬	山形	予選リーグ敗退
卓球	男	千葉	東北	福島	決勝トーナメント1回戦敗退
	女	千葉	福島	新潟	予選リーグ敗退
バレーボール		群馬	筑波	自治	決勝トーナメント1回戦敗退
バドミントン	男	自治	福島	独協	1回戦敗退
	女	女子医	山形	福島	〃
サッカー		東北	千葉	福島	3回戦敗退
バスケット	男	慶応	東北	自治	準々決勝敗退
	女	東邦	女子医	**旭川**	3位
柔道		千葉	慈恵	群馬 札医	予選リーグ敗退
剣道		新潟	独協	福島 慈恵	予選リーグ敗退
弓道		昭和	新潟	福島	6位
空手道		東京医	日大	慶応	1回戦敗退
水泳		日大	福島	慈恵	7位
総合		千葉	東北	福島	14位

研究室紹介

■ 耳鼻咽喉科学講座 ■

川堀眞一

当教室は現在、海野教授以下17名の教室員よりなっている。診療面では、道北・道東に耳鼻咽喉科の専門病院が少ないことより、道北・道東の診療のかなめとなりつつある。

研究は、各スタッフは各自の仕事を、旭川医大の卒業生を中心とした若い教室員は、教授の指導で研究を始めつつある。大学院生の一部は基礎の教室で仕事している。

普段はやさしいが、教育・診療にきびしい教授は呼吸生理学を中心に仕事をしており、鼻腔通気度、生体の防禦反応としての咳・くしゃみと喉頭の機能、インピーダンス計則法の鼻科学への応用、最近では鼻アレルギー剤の鼻腔内噴霧粒子の沈着状態をみて、治療剤のより良い方法を検討している。めったに怒ったことのない白戸講師はメマイがテーマで、視運動性眼振の緩除相・急速相の機序およびコンピューターによる解析をおこなっている。夜型の人で、病棟医長の矢島講師、いまだ和歌山市ナンバーのカブに乗っている川堀講師、和歌山弁の標準語でスポーツ、酒がいける高橋助手の3人は主に鼻アレルギーに関連した研究で、各々、気道アレルギーでの上気道・下気道の関連性、鼻アレルギー症状発症における好塩基球・肥満細胞の電顕と頭頚部腫瘍の電顕観察、鼻アレルギー患者のリンパ球能をしらべている。豪酒の坂本助手は寒冷による喉摘後の気管への影響を形態学でしらべると伴に小児の難聴を、旭川のことはなんでも知っている富山助手は猫の外側前庭核のニューロン活動と姿勢調節の研究をまとめ、近々稚内市立病院への出張が予定されている。若手の模範生で、臨床に頑張っている一期生の内藤助手は鼻腔通気度を中心に、55年入局の中村先生は鼻アレルギーでの好塩基性顆粒細胞を、金谷先生は第2生理で仕事している。2年生の奥出・野中・熊井・長島の諸先生は昨年一年間みっちり勉強し、多くの患者の主治医として頑張っている。1年目の北南・金井先生は現在勉強中である。他に産休中の早苗医員、野球のエースの堀川文部技官、岡泉・山本両嬢が医局にいる。

研究の成果、頭頚部腫瘍を中心とした臨床の成績は、国際学会、国内学会で発表されてきている。

教室では、忙しい診療、研究の合間をぬって、レクリエーションも盛んであり、北大との定期戦を含め、野球の試合が近づけば野球の練習に、又テニスに、夏には登山、魚釣り旅行が企画され、冬になればスキー旅行を含めスキーにと教室全体で余暇を楽しんでいる。また酒の飲み会では教授以下教室員全員が喜々として飲む〝まとまった〟教室である。

（耳鼻咽喉科　講師）

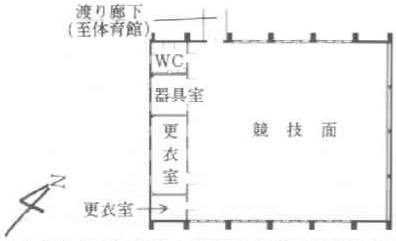
武道場新設決定！

かねてから望まれていた武道場が新設されることに決定しました。今まで武道場がなく十分な活動ができなかった柔道部・剣道部・空手部等も、この武道場が完成することによって、より充実した活動、各大会での活躍等効果的な利用が期待されます。

なお竣工予定は昭和58年3月を予定しており、総面積420㎡（渡り廊下を含む）で、道場へは体育館からの渡り廊下で結ばれます。

（学生課）

（平面図）



学内での盗難防止について

最近学内の更衣室で盗難が相次ぎました。どれも更衣室に財布等貴重品をおいたまま課外活動等を行っている際に盗難にあったということです。

事故を未然に防止するために現金等貴重品は各自のロッカーに入れるか身につけて、お互いに十分注意して下さい。

（学生課）

窓外

宮岸　勉

思いつくままに――その1

向精神薬時代

札幌で行われるある研修会で「向精神薬時代を迎えて」という話をするように依頼され、何を話してよいのか深く考えもせずに引き受けてしまった。8月上旬のことである。

向精神薬時代などといえば、精神分裂病や躁うつ病をはじめ、さまざまな精神疾患に対する薬が大いに研究開発され、治療がきわめて容易になった「良き時代」の到来を思わせる響きがあるが、実際は今日の精神科薬物療法の緒が見つかったのは近々30年前のことに過ぎない。

てんかんが神聖病または悪魔病と呼ばれて、精神医学の枠外にある別世界の現象とみなされたり、あるいは精神疾患の患者達が病者としてではなく、不幸な受難者であるという極印を押された暗く非科学的な時代があったことを思えば、確かに現代の発達した薬物療法は患者に非常な恩恵をもたらしたといってよい。ちなみに、現在わが国で使用許可が出ている向精神薬は、主として精神分裂病に用いられるもの28種類、主としてノイローゼに用いられるもの16種類、うつ病に用いられるものは16種類であり、さらに数種の薬が今も開発途上にある。睡眠剤も数え上げれば16種類にのぼっている。したがって、精神科病棟内の状況は良い意味でひと昔前とは一変し、患者、家族、病院スタッフとの治療的人間関係が非常に好ましいものとなり、疾患改善率も大いに高まった。

しかし、向精神薬の臨床応用についてはまだ数多くの問題が解決されなければならないのであり、現状は必ずしもすべてが「薔薇色の時代」ではないことを知っておく必要があろう。つまり、向精神薬がきわめて短い年月の間に急速に開発されただけに、その効果や副作用についてまだよく分からない点が少なくないことを精神科医達は痛いほど思い知らされているのである。

ところで、今、世界中の精神科医が渇望していることは、慢性期の精神分裂病により効果的な薬はないか、再発を確実に防止できる薬はないかということであり、痴呆（ボケ）を治療できる薬はないかということであろう。もっとも、このような妙薬の出現が期待されるのは特に精神医学の領域に限られたことではなく、医学のどの分野でも同じといってよい。

今から14年前、フランスの高名な精神薬理学者ピエール・ドニケルは「精神科の薬物療法の進歩は、過去十余年間の精神医学の発展を根底から変えてしまった。現在のところ、この混乱の結果を予測することは不可能である」と述べたが、その後14年を経た今日でも全くその通りであって、精神科薬物療法がどのようにすばらしい発展を示してくれるのか、未来への予測はまさに不可能といわざるをえない。ともあれ、向精神薬は今後も絶え間なく研究開発され、いずれは真の意味での「向精神薬時代」を迎えるであろうし、また、そうでなくてはならない。

そのような時代に到達するまで、われわれ精神科医は日常用いている向精神薬の有用性や安全性についてあくまでも慎重な吟味を怠ってはならないと思う。

（付記）向精神薬とは、精神疾患治療薬の総称であり、精神分裂病、躁うつ病、ノイローゼ等の精神症状を治療するために用いるほぼすべての薬が含まれる。

（精神医学講座　教授）